

〈学科10周年企画「地域構想学」を求めて〉

「地域構想学」の基本イメージ－基礎論の講義から

高野岳彦

東北学院大学教養学部地域構想学科

1. 「地域構想」に込められた意図

本誌創刊号の巻頭に、地域構想学科の「知」の特徴について、学科設立に尽力された佐久間教授による紹介がなされ、次の3点が掲げられている^{★1}。

- ①現場を起点とする「知」… 地域の生活者の視点、その客観的・分析的視点からの相対化
- ②自然環境と社会関係の双方に配慮する「知」… 現下の地域問題の多くが環境問題にもかかわる
- ③総合的な「知」… ローカルとグローバルの総合、地域の構成要因の総合

また学科名称の「構想」については、地域の人々の諸活動を組織化できる人材の育成という、「実践的、運動論的意味合いを含ませた」ものという。

つまり、「知」の特徴の3点は「地域」の視点を構成し、それに実践目標として「構想」力の育成を掲げて、本学科の名称が成立している。

これらの理念と育成目標は、どれか1つの授業で達成できるものではなく、また学科構成員1人の力で可能なものでもない。筆者は、基礎論、基礎実習、発展実習、地域情報解析、地域システム論、演習という学科授業、および学科理念と関係浅からぬ地理学、地誌学、東北地域論などの担当科目を通して、学生たちの「地域構想力」の修得に微力ながら意を注いできた。そして4年間の学習成果が卒業研究に結実できるよう、ゼミ学生たちへの助言と支援に努めてきた。実習や卒論を通して発見された地域の姿、そのより広い視野からの評価、問題改善への提言については、指導教員として可能な限り補足・充実させて公刊できるように努めている^{★2}。

さて筆者が努めてきた「地域」視点と「構想力」の育成について、紙面の限られた本稿で要領よく紹介する自信はないので、私の「地域」学のエッセンスを込めて構成している「社会と産業基礎論」の冒頭部分について紹介したい。

入学から半年から1年経過した学生たちに、学科

の授業を通して「地域構想学」とはどんな「学」と考えるかを出席カードに書いてもらおうと、「地域」については「ローカル」や「地元」が大半、「構想学」については「地域づくり」という趣旨の解答が多数を占める。一方で、多分野にわたる多様なトピックが学生たちの頭の中にどれほど関連づけられて吸収されているかについては、関心分野が定まりつつある2・3年生との会話から、かなり心許ない状況とを感じる。私の基礎論講義は、固定化しがちな学生の「地域」と「構想学」イメージの相対化、および多分野の事例の関連づけにいく分か役立っていると自負しており、3・4年のゼミ学生にたちに内容を思い出させて再確認させることもしばしばである。

2. 「地域」の初歩イメージ

1) まとまり、つながり

基礎論の初回講義で、私は「地域」を「まとまり」、「つながり」、「よりどころ」の3点から説明する。「地域」とは、何がしかの現象が「まとまり」をもって観察できる範囲のことである。農地や農業施設がまともっている範囲が農業地域、商店が集まっている範囲を商業地域と呼ぶごとくである。

この「まとまり」は、第一に客観的に観察可能な、「見える」現象の布置として認識できるもので、いわばヤカチとしての「まとまり」である。しかし「ヤカチ」としてのまともりは、まともりを構成している個々の現象や要素が特に理由もなく偶然そのように布置してみえているのかもしれない、考察対象とする意味もないものかもしれない。

これに対して「つながり」は、形式的な「まともり」を実質化させる関係や関連、つまり「まともり」を形づくっている個々の現象や要素間の相互関係であり、多くは客観的なヤカチとして見えないものである。そして、形式的なヤカチとしての「まともり」は、目にみえない相互関係に裏打ちされてはじめて

実質的な「まとまり」として理解できる。この相互関係がすなわち「つながり」である。

より具体的にいえば、カタチとしての要素間をつないでいる人、モノ、カネ、情報、感情、力関係といったものの流れややりとりであり、さらには自然立地的要因による地生態的関連性も含めたものである。つまり「地域」とは、諸現象の「まとまり」として把握され、それが偶然ではなく、実質的相互関係や関連にうらうちされた「つながり」で結び付けられた範囲、ということになる。

このように考えると、形式的「まとまり」よりも実質的「つながり」のほうが「地域」の本質であるように捉えがちである。しかし「地域」はこのどちらを欠いても成立しないクルマの両輪のようなものであると私は考えている。それは「地域」を、同類の概念といえる「社会」と比べてみると分かりやすい。「地域」は現実の土地や場の共有に裏打ちされたものであり、それゆえ客観的なカタチあるいは「景観」としての広がり共有するものと考ええる。

2) よりどころ

「地域」の具体的な姿の理解にはもう1つ視野に入れておきたいポイントがある。地域としてのまとまりとつながりが一過性のものでなく持続性を持つものであるとき、そこには「つながり」が集まり、また引き寄せる「場」を伴うのが常である。町内会には集会所や共同施設があり、サークルには部室があり、仙台市には市役所や他の公共施設がある。これらは各地域集団のまとまり・つながりの機能的「よりどころ」としての中心施設であり、文字通り「〇〇センター」と呼ばれる場合もある。

一方「よりどころ」には、構成員が集まるという行動の対象としての施設以外にも、思いを寄せたり、記憶を想起したり、共通の感情や感覚を呼び起こさせるような「象徴」としてのよりどころもある。記念碑やモニュメントは本来そうした目的で建立されたものであり、さらに住民みんなが日々眺める山や川、地域共同の祭りやイベント、住民が共有してきた歴史的記憶も、地域の人々をつなぐ象徴的なよりどころといえる。

3. 地域の発見：感覚から客観分析へ

1) 地域感覚

地域の基本イメージを理解した後は、地域は実際どこにどんなふうに残っているものなのか、地域発見の方法を考える。そこでひきあいに出すのが、私自身が本学赴任の折に転居した家の前のごみ集積所である。引っ越し当日は気づかなかったが、翌朝家を出たらそれがまさに目の前にあった（下写真）。一見無粋なごみ箱だが、町内会の告知板を備え、町内の世帯規模に対応した無駄のない大きさと周囲と調和した色の機能美に思わず感嘆した。それはまさにご近所がつながる「近隣地域」の存在を主張しているようであった。



その日の帰宅後、夕刻の天気予報をみていたら聞きなれない地域名が耳に残った。「東部仙台」、「西部栗原」…である。気になって気象庁のHPを探索してみると、それは山沿いと沿岸の天候界を含意した宮城の独自区分であった。また当時はアメリカのイラク侵攻翌年で「湾岸」という地域名がTVに頻繁に登場した。それは、自然地域名「ペルシャ湾」が無名化された「湾」に「岸」を付した、当時の誰もが知る地政学的地名に転化したものであった。

こうした事例を引きながら、「地域」は日常生活のいたるところにあり、そのまとまりには近隣から県さらには国や大陸規模まで多様なスケールがあり、その発見の第一段階はまずそうした多様な地域の存在を感じ取ろうとする「感覚」を持つべきことを納得させる。「まとまり」、「つながり」、「よりどころ」とともに「地域感覚」を持つてまず「地域」を感じることを、すなわち「地域構想学」への出発点だと私は考えている。

2) 客観化と相対化…分析的見方

「感じる」の次に必要なことは、感じた地域や地域問題の客観化と相対化である。関連文献の検索、収集、読解、比較整理、当該地域の地図情報の収集、関連統計の分析と比較、知見や情報の分布図化といった、地域を「分析的」に見る技能の習得であ

る。基礎実習，発展実習，地域情報解析，3年次演習などの授業で技能修得に努めているが，選択科目で一貫した技能蓄積ができないのが，多様な分野を含む本学科の難点の1つではある。

こうした地域の分析的把握の目的は，地域の特性や問題の背後にある「構造」を捉えることにあるが，この点は発展実習レベルでは容易でなく，卒業論文で達成できるよう指導をしている。

3) スケールと形成要因

1章末尾で述べたように，学生たちが「地域」という語から連想するスケールは基本的に local であり，regional ではない。冒頭で確認した本学科の「知」の特徴の最初が「現場」重視であり，それは理解できることであるが，同時に「相対化」と「global」視点の必要性も掲げられている。いうまでもなく現代の local 問題は，national，global と直結している場合が多く，local な現場だけ見ても問題の構造は十分解明できない。地域を local ではなく可変的スケールを内包する regional と認識させる視点は，重層化した地域の「まとまり」，「つながり」の形成要因の探求にとって不可欠である。

4. 時代性と歴史感覚 … 立体的な地域観

歴史感覚は，「現場」を相対化してとらえるもう1つの必須視点である。地域は日々変化しているが，今ある地域の姿は短期的変化が長期にわたって累積して形づくられた不動産である。変化の刻印は，歴史のエポックとされる時期のものが長く残る傾向があり，その意味でも地域は歴史の所産といえ，地域を知るには歴史を知らなければならない。いわゆる地域を「立体的」に知ることである。これは当然のことであるが，本学科入学生のほとんどが，地域を知るのに歴史は無関係と思っていることに気づき，基礎論の2回目を「歴史」の確認に充てている。

空間のまとまりが「地域」であるように，時間のまとまりは「時代」であり，この「時代性」を感じる力を筆者は「歴史感覚」と読んでいる。その上で，「今」とはいつからかを考える。人口統計や産業経済指標，基本法レベルの制定や国際的な事件，そして Windows95 の登場に象徴される技術革新をあげつらいながら，1990 年前後で世界や地域をとりまく状況は大きく変わり，その意味で 1990 年代以降

が「今」なのであると説いている。同時に，伝統文化や歴史遺産が地域づくりのよりどころとされる昨今の状況とあわせて，縄文，弥生，古墳，古代，中世，近世，戦国，幕末維新，近代，戦後，高度経済成長，安定成長 … といった歴史上のエポックについての基本知識が，地域の理解を豊にしてくれることを理解させる。空間スケールと同様，こうした時間・時代スケールの認識は，「まとまり」の要因を考える上でも重要なことである。

5. 地域学から「構想学」へ

以上の「地域」論をうけた「構想学」については紙幅が尽きたので別稿に譲るが，基本的には，地域を「構想」する作業は，まず地域の感取から客観化，相対化，構造発見の一連の地域研究の手順を前段（広義の地域構想学）とし，具体的な地域の問題状況の改善を考えるという後段部分が「よりよい地域をつくる」という学科理念に沿った（狭義の）地域構想学と位置づけている。ただし，どんな状態が「よりよい」のかについては，ローカル視点だけでなく，メソ，ナショナル，グローバルの視点，また他の地域のローカル視点もふまえてみないと判断できないこと，また政治経済状況によっても変化していく点に注意すべきである。

地域が議論される時代は，昭和初期においても 1970 年代の「地域主義」の時代においても，国家の単線的な発展政策に疑問がもたれた時代であった。21 世紀の今もまた格差拡大，少子高齢化，そして大災害を経験して地域空洞化が現実化する不安な時代である。この時代においては，「地域」の研究は「構想」を必然的に伴う。また「地域」を伴わない「構想」は空虚でもある。ゼミ学生には，着実な地域分析の上に，卒論の最後に問題改善に向けた提言を自身の言葉で示すことができるような指導を心がけている。

<注>

- ★1：佐久間政広，2011，「地域構想学科がめざすもの」，地域構想学研究教育報告，1，1～4
- ★2：本誌1号から今号掲載の高野名を含む報告文9件のうち，前号の広田湾調査以外のものは，発展実習（3件），ゼミ実習（2件），卒業研究（2件），修士論文（1件）を元にしたものである。